



現地ルポ

韓国兵にゲリラの嫌疑をかけられ身体検査されるベトナム人女性。 AP/AFLO

ベトナム戦争中、韓国軍が多くの婦女子を強姦・凌辱した事実を本誌は報じてきたが、さらにこのほど発見された米公文書により、ベトナムに「韓

国軍慰安所」が存在していたことが判明した。韓国政府が沈黙を守る中、本誌取材班はベトナムに飛び、その隠された史実を探った。

ベトナム戦当時の膨大な米公文書から「韓国軍慰安所」

村山康文

と本誌編集部

MURAYAMA Yasufumi

韓国軍慰安所では10代のベトナム少女が連夜、乱暴な兵士の相手をさせられていた

旧サイゴンで当時を知る元憲兵が衝撃証言

その凌辱と乱行の黒歴史を暴く！

ベトナム人慰安婦

韓国軍の

朴槿恵大統領がヒタ隠す韓国最暗部

日本の教科書から「慰安婦」の記述が消えたことについて、韓国育省は「過去を否定し、歴史的審判を回避している」との声明を発表した。だが、「過去を否定し、歴史的審判を回避している」のは、一体どちらなのか。むしろ韓国こそ「韓国軍慰安婦」という不都合な史実から目を背け続けてきたのではなかったか。朴槿恵政権の急所を突く



上／韓国軍慰安所とされたトルコ式浴場の建物。現在は食堂になっている。左上／韓国クラブが営業していた旧ホンハーホテルの建物。左下／戦時中、売春婦のたまり場だったブイ・ヴィエン通り。

の記述を探り当てたのは、TBSワシントン支局長の山口敬之氏。『週刊文春』（4月2日号）に掲載されたこのスクープ記事は米国でも注目され、3月26日の米國務省定例会見でも話題に上った。

記者の「（韓国軍慰安所の問題は）人身売買の一例か」「韓国政府はこの件について公式見解を出すべきか」という質問に対し、ラトケ報道官は「記事には関心を持っていて、コメントは控える」と言及を避けたものの、昨年の国連総会で「戦時の女性への性暴力は人権と人道主義に反する行為」とぶつた朴槿恵大統領の面目は丸つぶれになった格好だ。

問題の書簡は、サイゴン（現ホーチミン市）の米軍司令部

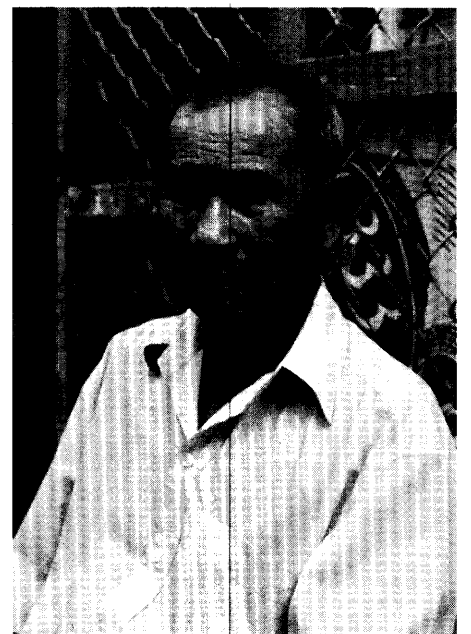
が駐ベトナム韓国軍の蔡命新・司令官に宛てたもので、韓国陸軍幹部による不正通貨の使用や物資の横流しを指摘する内容。その中で米軍は、捜査対象となった旧サイゴン市内の Turkish Bath（トルコ式浴場）が「韓国軍による韓国兵専用の福祉施設＝慰安所」であると断定し、施設で売春行為が行われ、ベトナム人女性が働かされていることを併せて指摘したのである。米軍はまた、その裏付けとなる韓国軍大佐の署名入りの書類も押収し、これらの事実を蔡司令官に突きつけた。

慰安所開設に韓国軍幹部の影

書簡が作成されたと推定される69年当時、サイゴンには韓国軍ベトナム司令部が置かれ、海軍輸送戦隊の「白鵝部隊」や空軍支援団の「銀馬部隊」をはじめとする多数の韓国兵が駐留していた。その数は、8年間で延べ2万人に上る。またサイゴンは前線で戦う兵士の休息地でもあったため、夜の歓楽街は連日、軍服姿で闊歩する韓国兵で賑わっていたという。

書簡で指摘された旧サイゴン市内のトルコ式浴場は食堂に姿を変え現存していた。当時からこの付近に住む、元南ベトナム政府軍憲兵のグエン・ゴック・ビンさんはこう証言する。

「この地域に軍服姿の韓国兵



元南ベトナム政府軍憲兵のビンさん。韓国兵の行状を鮮明に記憶していた。

が増え始めたのは68年ごろからで、ほぼ同時期に浴場がオープンしました。建物はベトナム人女性が所有していましたが、彼女と親交のある韓国軍幹部と思しき人物が譲り受け、浴場を開業したのです。当時、私は南ベトナム政府軍の兵士として米・韓国軍と連絡を取り合う立場にあったので、浴場が出来た経緯はよく覚えています」

う。ビンさんが続ける。

「韓国兵は夜になると米軍のMP（憲兵）らとジープでこの辺りを徘徊し、酒を飲み大騒ぎしていました。その勢いで浴場に遊びに行くのです。店で働いていた女性は全部で7、8人。いずれもベトナムの貧しい農村からやって来た10代の少女でした。彼女たちは、毎日のように大勢の韓国兵の相手をさせられていた。乱暴な扱いを受けることもあ

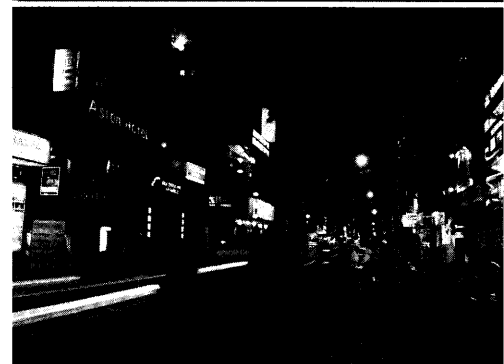
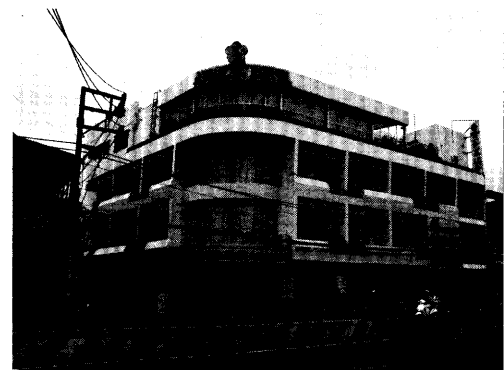
るらしく、韓国兵のことをとても嫌っていました」

もともと韓国兵の慰安所として作られた浴場は、やがて米兵にも開放されるようになった。米兵が利用する際の料金は38ドルだが、「韓国兵は1回3〜4ドルで利用できた」とビンさんは証言する。当時

の韓国軍2等兵の平均月給は約50ドル。米軍2等兵の月給が約240ドルだったことを考慮しても、韓国兵が優遇されていたことは明白だ。

さらに取材を進めると、旧サイゴン市内の各所で韓国軍の乱れ切った風紀を物語る証言を得ることができた。当時を知る住民が語る。

「浴場から約1km離れた場所には、米軍MPの施設がありました。その鼻先には売春斡旋を目的とするバーが建ち並び、韓国兵や米兵が入り浸っていた。付近の『ブイ・ヴィエン通り』と呼ばれる歓楽街は売春婦のたまり場で、バーから連れ出したベトナム人女性を連れ込むためのモーテルもたくさんありました。女性を巡って兵士たちが殴り合う



光景を目にしたこともある。遊びに行く前に麻薬を使う者も多く、トラブルは絶えませんでした」

元南ベトナム政府軍の兵士だったタイン・アン・コンさん（仮名）もこう話す。

「サイゴンのブイ・ティー・スワン通りは、麻薬を扱う店が軒を連ねていたことから『麻薬通り』と呼ばれていた。休暇のため前線から戻ってきた韓国兵は、空港からここに直行し麻薬を購入、使用してから女性を買いに行くのが恒例でした」

韓国兵が女性を求めて繰り出す先は、慰安所だけに止まらなかった。

「5区にあるホアビン公園は別名『ダイハン（大韓）公園』と呼ばれていました。ここで



取材に答えるトゥエットさん。韓国兵に得体の知れぬ恐怖を感じたという。

女性たちにピルを飲ませて行為に及ぶため性病が蔓延していたそうです。性病が元で命を落とした女性もいたと聞いています」

避妊に失敗し女性性が身ごもった場合も責任を取らず、韓国兵がそのまま帰国してしまうケースも相次いだ。そうしてできた子供は「ライダイハン」と呼ばれ、ベトナム戦争終結後

も困窮と差別の中で生きることとなった。ベトナムには最大で2万人のライダイハンがいるとも言われている。

当時、同ホテルの裏手に住んでいたホアン・ティ・バツク・トゥエットさんは、欲望をきらつかせる韓国兵に、得体の知れない恐怖を感じたという。

「ホテルの近くにある倉庫で、軍服を着た韓国兵たちが番号札を付けた女性を並ばせていたことがありました。何をす

商売をする女性を漁るため、毎日のように韓国兵が押し寄せたからです。女性はいつも20〜30人ほどいて、韓国兵の間では『ホアビンの女は質が高い』と評判でした。ただし、女性から聞かされるのは韓国兵の悪評ばかり。女性が服を脱ぐ間もなく乱暴に押し倒したり、ことを終えた後に『お前は下手だ』と罵り、金を払わない韓国兵がいたからだそうです」（前出・コンさん）

福引でセックス
相手を選ぶ

この他、旧サイゴン市内に

は韓国軍専用の飲食施設があった。そのひとつが、市の中心部・フーニャン区の「ホンハーホテル」に店を構える「ハンクオック・クラブ（韓国クラブ）」だ。しかし、その実態は「クラブとは名ばかりの韓国軍慰安所のようなもの」（近隣住民）だったという。

付近でヘアサロンを営むゴ

「ホテルの近くにある倉庫で、軍服を着た韓国兵たちが番号札を付けた女性を並ばせていたことがありました。何をす

ると、彼らは福引の抽選機のようなものを持ち出した。セックスの相手を選ぶゲームをしていたのです。番号で選ばれた女性は、韓国兵に手を引かれどこかへと消えていきま

「軍人相手に性的な接待を行っていた」——爆弾証言を発掘

朴槿恵の父がベトナムに送った 「芸能人慰問団」の正体

朴正熙大統領

ベトナム戦争中、韓国が「芸能人慰問団」がたびたび現地に派遣されたことは、当時の新聞でも報じられている。しかし、もし彼女たちに与えられた任務が韓国兵の「性欲処理」だったとしたら……？

1965年、本格的なベトナム派兵を開始した朴正熙政権は、戦場における兵士の「性欲処理」問題に直面していた。派兵直後から韓国兵による強姦事件や性犯罪が相次いだだけでなく、買春中の韓国兵がベトナムに襲撃され捕虜として捕らえられるケースが多発したのである。

こうした事態を重く受け止めた朴大統領は、直ちに軍指導部や国防委員、現地関係者を青瓦台（大統領府）に召集し解決策を協議した。そこで朴大統領が提案したのが、ベトナムでの慰安所設置だった。だが、この案は当時の駐ベトナム韓国大使らの反対に遭

い見送られた。彼らが反対したのは人道的見地からではなく、経済的損失を懸念したためだ。ジャーナリスト盧載鉉氏の『青瓦台秘書室2』（93年）に詳しい経緯が書かれている。「慰安所を設置すればコストが高むだけではなく、兵士がドルを本国に送金せず慰安所で消費してしまう恐れがある」大使らはそう進言した上で、

本誌編集部

「派兵期間は1年間に過ぎず、その程度の期間なら性欲をコントロールできるだろう」と付け加えたという。もともと、その後ベトナムに「韓国軍慰安所」が設置されたことを考えれば、大使らの見通しは甘かったと言わざるを得ない。そうした中で、朴大統領はあ

る代案を思いつく。女性芸能人による「慰問団」の結成だ。（慰安所設置の）代わりに芸能人慰問団を送るので、これを積極的に活用して兵士たちの士気高揚に資するよう、大使館の協力を要請する。駐ベトナム大使にそう通知した朴大統領は、8年間で延べ1200名近くの女性芸能人をベトナムに送り込んだ。

慰問団は韓国軍の性接待要員だった

戦時における芸能人の部隊慰問は決して特殊なことではない。大戦中の日本軍は宝塚歌劇団を動員して慰問公演を行い、朝鮮戦争時の米軍はマリリン・モンローを現地に派遣して兵士を鼓舞した。だが、「朴大統領が慰問団を結成した真意は別のところにあった」と『親日派のための弁明』などの著作がある作家の金完燮氏は証言する。

とで自身のポジションを確保していた。いわば持ちつ持たれつの関係だったのです。そこに目を付けた朴大統領は、慰安所設置に比べてコストが安上がりな女性芸能人の利用を思いついた。もちろん、彼女たちの多くはベトナム派遣を嫌がりましたが、拒否すれば芸能界追放は免れない。慰安所結成の裏には大統領府による暗黙の強制があったと見て間違いありません」

当時、19歳でベトナムに派遣されたある人気歌手は、韓国のテレビ局KBSの報道番組でこう証言している。

「政府にベトナム行きを命じられた芸能人は『渡航時に何があっても政府にはいかなる瑕疵もない』との覚書を書かされました。慰問はお金にもならず、誰もが嫌がっていた」

彼女の口から「性接待」について語られることはなかったが、派遣前にステージを放り出して逃げだす者もいたという証言からすると、やはりこの慰問団は特殊な性格を帯びていたことが判る。

半ば強制的にベトナムに派遣された彼女たちもまた、韓国軍の被害者だったのではない



芸能人慰問団の活躍を報じる1969年7月8日付の「東亜日報」。韓国部隊だけでなく、駐ベトナム米軍将校クラブでもショーを開催した。

潜入ルポ

いまなお置屋街として残る隠蔽された「村」

韓国政府によつて米兵の相手をさせられた「米軍慰安婦」たちの嘆き

在日韓国人ジャーナリスト
コナー・カン
Connor Kang



ヨンジュコルの38度線置屋街で客引きをする女性。かつては80軒以上の飾り窓が軒を連ねたが、住民の反対と再開発の余波を受け風前の灯になっている。

写真=本誌撮影（左・右とも）

韓国には、朝鮮戦争後に朴槿惠大統領の父・朴正熙が米兵向けに全国に設置した歓楽街「基地村」が今も残る。ここで米兵相手に売春する女性たちはかつて「米軍慰安婦」と呼ばれ、人権を踏みにじられてきた。数々の悲劇を生み出してきた基地村の今をレポートする。

＊

ソウル中心部から車で約1時間。北緯38度線（北朝鮮との軍事境界線）にほど近い京畿道坡州市に「ヨンジュコル」という町がある。この町には今にも朽ち果ててしまいうような商店が存在するだけで、人通りは少なく交通量もまばらだ。空に向けて伸びるキリスト教会の赤い十字架以外に目を引くものは何もない。そのヨンジュコルの中心を流れる用水路の脇に、背の高い木板や塀で囲まれた異様な一角が

ある。いわゆる「飾り窓」が軒を連ねる大規模な置屋街だ。「オッパ！、ネガチャレジュルケノ（お兄さん、私が尽くしてあげる）」

敷地に足を踏み入れると、派手に着飾った女性たちがガラス戸から身を乗り出し、猫なで声で誘ってきた。20代前半と思しき女性もいれば、年齢不詳の女性もいる。皆、笑顔を浮かべながら客引きに動いているが、その微笑みも一瞬。筆者が店の前を通り過ぎると、女性たちは踵を返し、仏頂面で店の奥に退いた。客待ちをする女性たちは各々スマートフォンをいじるなど、気だるそうな様子で、その表情は一樣に曇っている。

女性の1人に話を聞くと、「置屋の花代は30分のショートコースが10万ウォン（約1万1000円）。女性の取り分は半分にも満たない。かつ

ではソウルなど遠方からも客が来たが、米軍基地の撤退、2004年に施行された『性売買特別法』の影響と不況の煽りで客足はだんだん遠のいてしまった。今は、東南アジア系の労働者や、兵役中に外出許可を利用して遊びに来る韓国兵で何とか商売が成り立っている」と、嘆いていた。

1961年、朴正熙政権は売買春を禁じる「淪落行為等防止法」（性売買特別法の前身）を制定する一方で、「観光産業振興法」を發布した。

同法は外国人を対象とした性風俗サービスを実行上許可するもので、全国に104か所の特区が設けられた。そのうち61か所が坡州市をはじめとする京畿道に集中し、多くが米軍基地の近くに置かれたのである。こうした特区は後に「基地村」と呼ばれる歓楽街となり、米兵と、彼らに性



AP/AFLO

的サービスをする「米軍慰安婦」で賑わった。ヨンジュコルもそのひとつだ。

朴大統領が特区を設置したのは、外貨獲得に加え、在韓米軍に便宜を図ることが大きな目的だった。時の韓国軍事情権にとって、北朝鮮との軍事的均衡を保ち政権を維持するためにも、在韓米軍の駐留が死活問題だったからだ。

韓国紙『毎日経済新聞』（69年4月24日付）によると、69年当時に韓国にいた売春婦は

推定2万2000人。基地村が多く存在した京畿道には、そのうち1万3000人が集中し、「坡州郡管内では38の基地村に約5000人の慰安婦がいた」という。その中には未成年者や人身売買の被害女性も相当数いたとされ、将来を悲観した慰安婦が自ら命を絶つ事件も相次いだ。

57年7月21日付の『東亜日報』には、「米軍慰安婦、境遇に悲観し自殺」という見出しの記事がある。釜山市・田浦

洞の米軍慰安所で働く女性が「いくらあがいても残酷な慰安婦生活、やればやるほど負債だけが増えていく。死ぬしかない」という遺書を残して自害したという記事だ。遺書の行間からは、女性が何者かにより売春を強いられ、管理売春の主体が韓国政府であったことは「公然の秘密」とされ、半世紀以上に亘って封印されてきた。

慰安婦はドルを稼ぐ愛国者

米軍慰安婦の存在について韓国政府は、これまで肯定も否定もせず曖昧な態度をとり続けてきた。だが近年、元慰安婦の女性や市民団体、また一部国会議員の告発により、徐々にその全容が明らかになりつつある。14年6月には、元米軍慰安婦122人が韓国政府を相手取り、謝罪と損害賠償を求める集団訴訟を起こした。その過程で、慰安所の凄惨な実態が詳らかにされたのである。

16歳のころ知人に騙されヨンジュコルの米軍慰安婦となった原告の一人、金ジョンジャさんによれば、慰安婦は毎

TopFoto/AFLO



朴正熙大統領は国策として「基地村」事業を推進した。

に対し、28時間の挺身、美容、衛生及び英会話などの教育を施し、（性病）検診を受けた女性のみ慰安行為を許諾することなど、基地村で働く女性の処遇が協議された」と伝えている。

だが、基地村の規模が拡大するに連れ、性病の蔓延は次第に深刻な問題になっていった。これに業を煮やした米軍側は70年代初頭、韓国政府に「基地村における性病管理の徹底」を要求した。折しも、当時はニクソン大統領がアジア全域での軍縮を打ち出した直後であり、在韓米軍の削減・撤退を恐れる韓国側はこの要求を呑まざるを得なかったという。

当時、韓米合同委員会の韓国側幹事を務めていたギム・ギジョ氏は市民団体「太陽の光社会福祉会」の会報で次のように証言している。

「当時、米軍司令官だったベスト大佐は、米兵の休息とレクリエーションのために基地村の品質向上を要求した。米軍の継続的な駐留を望む青瓦台（大統領府）は1億ウォン

の予算を投じ、議政府や東豆川、安亭里などの基地村で浄化事業を開始した。米軍の主張をほぼそのまま受け入れた形だ」

こうして始まったのが、基地村で働く女性たちの性感感染症管理を主目的とする「基地村浄化対策」事業である。韓国政府は直ちに動き出し、嫌疑のある女性を片っ端から保健所に連行した。検査で陽性が出た場合、女性は収容所に監禁されベニシリンによる治療が施されたが、その際、ベニシリンの過剰投与によるアナフィラキシーショックで死亡する者もいたという。

前出の元米軍慰安婦・金ジョンジャさんは、韓国紙『ハンギョレ』の取材に、

「基地村の女性は収容所を『丘の上の白い家』と呼んでいました。(部屋)窓には鉄格子がはまっていて、まるで刑務所のようにでした」と収容所の様子を明かしている。

なお、基地村浄化対策への韓国政府の関与は、韓国民主党の俞承希議員が13年11月に公開した朴正熙大統領の直筆署名入り公文書により決定づけられているが、この動かぬ証拠を突きつけられても、韓

国政府は固く口を閉ざしたまま。俞議員は前述の公文書を12年の時点で入手、国会への提出を予定していたが、大統領選を控えた朴槿恵大統領のハンナラ党(現セヌリ党)から、「提出を見送るよう強く要請された」ことも明らかにしている。

フィリピン女性が米軍慰安婦を務める

2000年代に入り在韓米軍基地の縮小、撤退が進むと、各地に点在する基地村も少なからぬ影響を受けた。現在、往時の面影を残しているのは前述のヨンジュコルと、同じく京畿道にある東豆川の基地村のみだ。

現在、東豆川には「キャンブ・ケイシー」をはじめ3つの在韓米軍基地が存在する。かつてに比べ規模は大幅に縮小されたが、基地には今なお5000人近い米兵が駐留。

通称「アメリカ通り」と呼ばれる基地村は約700mの狭いエリアで、周辺には境界を示すラインが引かれていた。基地村内では米軍MPがパトロールを行っていたが、韓国警察はその後を追従するだけで積極的な取り締まりは行わない。

まさに「米軍の占領地」さながらの基地村には、外国人専用の酒場が立ち並んでいた。ここにはヨンジュコルのような飾り窓はなく、店の多くは

バーやナイトクラブの体裁をとっている。働く女性の多くはフィリピンからの出稼ぎ労働者だ。

「米兵による92年の韓国人ホステス殺害事件を機に、韓国人売春婦の姿は消えた。代わりに入ってきたのがフィリピン女性だ。近年は取り締まりが徹底され、これらの店で露骨な売春行為が行われることはない」

この地で古くから飲食店を経営する男性はそう証言するが、筆者はナイトクラブで働く20代のフィリピン女性から次の証言を得た。

「ここには『Juicy Bar』(ジューシーバー)と呼ばれる店が多数存在する。女性が露出度の高い服を着て、セクシヤルなサービスをやる店だ。女性はお酒の相手だけではなく、求められればキスに応じ、身体も触らせる。過激なサービスをして客にどんどん酒を飲ませ、利益を上げることが店から求められているからだ」

彼女が売春行為の有無について語ることはなかったが、件の『Juicy Bar』を訪れると、薄暗い店内では酔った米兵がフィリピン人ホステスを相手にディーブキスやペッティン

グなどの過激な行為に及んでいるのが確認できた。この店のホステスによると、

「フィリピン人ホステスは給料も外出も経営者に管理されている。月給は500ドル前後。渡航費の立て替えなど返済を引かれると手元にはほとんど残らず、セクシヤルなサービスで稼がなければ生活はできない。米兵の求めに応じ、ホテルで売春する女性は皆無ではない」という。

つまり、東豆川の基地村では、韓国人女性に代わり今もフィリピン女性が米軍慰安婦を務めているということだ。

過去、女性人権団体の調査により、基地村で働く外国人女性への暴力、売春強要などが、韓国政府がこれを組織的に調査した痕跡はない。

前出・金ジョンジャさんは『ハンギョレ』のインタビューでこう訴えた。

「日本軍慰安婦は被害者として認定するのに、なぜ米軍慰安婦被害者は国家が目も瞑っているのでしょうか」

朴槿恵大統領は、米軍慰安婦の悲痛な叫びを同じ女性としてどのようにとらえているのだろうか。

写真=本誌撮影(上・下とも)



上/東豆川の基地村を巡回する米軍のMP。下/外国人専用のナイトクラブには性的サービスを提供する店もある。

韓国政府公式資料と元軍幹部の証言で判明した朝鮮戦争の恥部

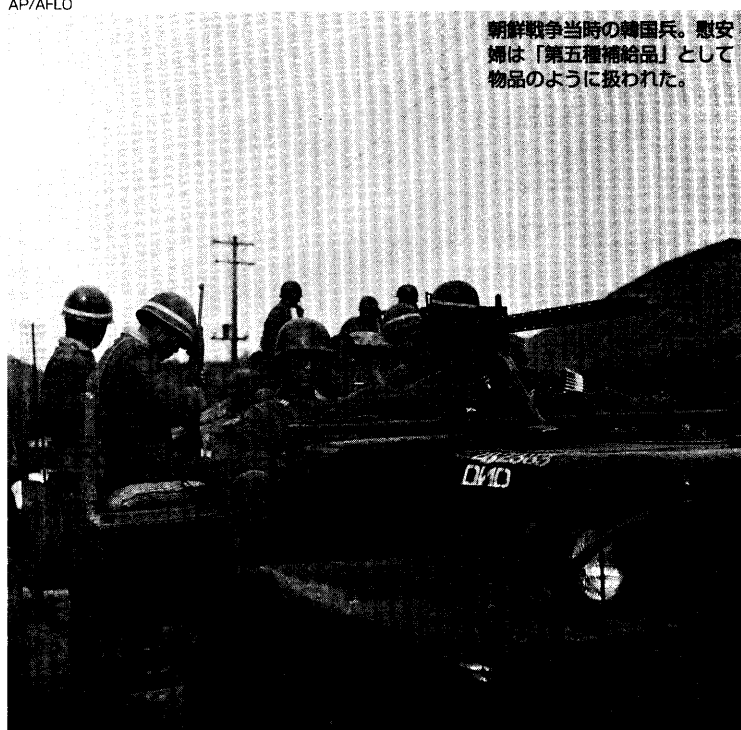
北から連行された若き女性が
韓国兵の「性奴隷」にされていた

韓国政府が旧日本軍の慰安婦関連史料を永久保存し、ユネスコの世界遺産登録を目指しているという。だが、そこに自国による「韓国軍慰安婦」の史料は含まれない。ならば、

歴史の闇に埋もれる前にここで公開しよう。韓国軍が女性をどのように扱ってきたかという歴史的記録の数々を。

朝日新聞が「吉田証言」(*)

*



朝鮮戦争当時の韓国兵。慰安婦は「第五種補給品」として物品のように扱われた。

の誤報を認めた昨年8月以降、強制連行のカードを失った韓国政府は、慰安婦の「人権蹂躪」を訴える戦術に舵を切った。日本政府から謝罪と賠償をもぎ取るための材料だった「強制性」の根拠が揺らいでいるからだ。

人権蹂躪は、韓国が慰安婦問題で日本を非難するうえでの基盤となっている。これをクロージアアップし国際社会からの同調を得て、自国に有利な国際世論を形成しようという算段だ。その一方で、「正しい歴史認識」が口癖の韓国政府は、自国が主導したもう一つの慰安婦の存在をひた隠しにしていた。

韓国軍慰安婦の存在が初めて韓国メディアで報じられたのは2002年2月。慶南大学の金貴玉・客員教授(現・漢城大学教授)が「朝鮮戦争中に韓国軍慰安婦がいた」と

藤原修平

FUJIWARA
Shuhei

という調査報告を、立命館大学の国際会議席上で発表したのである。このことは「朝鮮日報」をはじめとする韓国の主要メディアで大きく報じられ、韓国社会に衝撃を与えた。

金教授が根拠の一つとして挙げたのが、1956年に韓国陸軍本部が編集した公式資料「後方戦史・人事編」にある記述だ。だが現在、この資料を民間人が閲覧することは困難である。その理由は後述するが、筆者はわずかな手掛かりから資料の入手に成功した。そこには朝鮮戦争(50〜53年)時の「特殊慰安隊」設置の経緯が次のように記されていた。

「士気昂揚はもちろん、長期間の戦闘で異性に対する憧憬から惹起される生理作用がもたらしうる性格の変化、憂鬱

症やその他の支障を未然に防止するために、特殊慰安隊を設置することになった」

資料では、慰安隊として活動する女性を「慰安婦」と称し、「週2回、軍医官が厳格な検診を行い、性病に対する徹底的な対策を講じた」ことも明記されていた。性病検診を定期的に行うのは、慰安婦が不特定多数の兵士と性的な関係を持つことを前提としていたため、韓国陸軍はそうした組織を公式部隊として運営していたことが判る。

慰安隊はソウル市中区忠武路周辺と、日本海に面した江原道江陵地区にそれぞれ3部隊、そのほか江原道の主要都市である原州、春川、束草にそれぞれ1部隊が配置され、計9か所に89名の慰安婦が動員された。

慰安隊の運営開始時期については定かではない。ただ、設置目的が朝鮮戦争で戦う韓国軍のためであること、前述の『後方戦史』に52年の特殊慰安隊実績統計表が掲載されていることから、51年までには運営が開始されたと推定される。なお、慰安隊の廃止は54年3月と明記されていた。統計表には、4部隊にお

る52年の利用実績が月ごとにまとめられている。利用者が多くなるのは春から夏にかけてで、最も多いのは8月の約2万2000名。1年間の利用者は延べ約20万5000名に上った。慰安婦は単純計算で1日平均6名以上の兵士の相手をしていく計算になる。

功績に応じ慰安所利用チケットを配給

金教授は、「上記9か所の固定式慰安所のほかに、移動式慰安所があった」ことも明らかにしている。後者は軍部からの要請があると、指示された部隊まで出張して特定期間テントを張り、そこで運営する形態をとっていた。

移動式慰安所については、朝鮮戦争に参加した元韓国軍幹部の回顧録にも書かれている。例えば、全斗煥政権下で陸軍第二司令部司令官などを歴任した車圭憲氏は、回顧録『戦闘(85年)』の中で、「24人用の野戦テントの内部をベニヤ板と防水布で仕切った野戦寝室に慰安婦は収容されていた」と、当時の移動式慰安所の光景を綴っている。

また、同じ頃に首都師団の小隊長であった金喜午氏の回

顧録「人間の香り」(00年)によれば、移動式慰安所には「小隊ごとに2名(中隊全体で合計6名)の慰安婦が日中の8時間に限って宛がわれていた」という。さらに金氏は、慰安隊が「第五種補給品」と呼ばれていたことを同書に記

特殊慰安隊実績統計表

昭和42年5年度

(附表第8號)

慰安隊員	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
19	3,500	4,110	3,860	2,770	2,900	3,780	3,780	4,000	4,370	3,870	4,100	3,650	44,240
27	4,580	4,900	5,600	4,400	6,800	5,680	6,000	7,280	4,850	2,160	4,950	4,170	61,370
13	2,180	1,920	2,260	1,700	2,180	2,400	2,170	2,700	1,680	1,870	1,980	2,140	25,370
30	6,000	6,500	7,800	8,000	5,900	4,760	7,970	8,000	4,780	3,900	4,200	5,700	73,600
計	88	16,270	17,480	18,070	16,870	17,830	16,620	19,920	22,080	15,760	11,770	15,240	204,580

1966年に韓国陸軍が編纂した資料には、52年の「特殊慰安隊」に関する統計が掲載。89人の慰安婦に延べ20万人以上の韓国兵が殺到した。

していた。韓国軍の実際の軍補給品は食料や被服類、燃料など一々四種までで、慰安婦をそれに並列させるこの俗称は、慰安隊の女性たちが「物品」として扱われていたことを示している。これが「人権国家」を標榜する韓国の実態だった。

この移動式慰安所は兵士に大変な人気で、利用にチケット制を導入した部隊もあった。

ベトナム派遣軍最高司令官を務め、退任後は駐スウェーデン大使などを歴任した蔡命新氏は回顧録『死線幾たび』(94年)で、「兵士には戦場で勇敢に戦った功績と勲章の数に応じて、慰安部隊利用のチケットが与えられた」と振り返っている。また、慰安婦が童貞の隊員の「二物を弄ぶ」ところも生々しく描き、移動式慰安所が韓国軍に根付いていたことを図

らずも露呈させた。

前出・金教授は昨年発表した論文の中で、「こうした韓国軍慰安婦はもともと北朝鮮領内にいた人たちで、それまで売春とは無縁であった女性たちを占領地域から連れてきて慰安婦にしていた」という北朝鮮出身女性の証言を紹介している。

金教授は関係者への聞き取り調査により、「51年7月に停戦協定が始まり戦況が小康状態になると、韓国軍兵士は朝鮮人民軍に従軍していた『北朝鮮民主女性同盟』所属の10代後半から20代後半の若い女性を連行するようになった。

慰安婦にされた女性には中学生ほどに見える人もいた」との証言も得たという。

「韓国軍慰安婦の研究を自制せよ」

このように数々の記録や証言が残されているにもかかわらず、韓国政府は自国の慰安婦問題を黙殺してきた。慰安婦問題で日本への攻勢を強めるために、韓国軍慰安婦は「あつてはならない存在」だからだ。

金教授が02年に韓国軍慰安婦問題を提起した直後の韓国

国防部の動きは素早かった。

彼女の所属大学に「韓国軍慰安婦関連の研究活動を自制せよ」と警告を発し、国防部長官の軍史編纂研究所に保管されていた前掲の『後方戦史』を棚から撤収、閲覧を不可能にしたのだ。また、これに呼応するかのよう、冒頭で紹介した主要紙による02年の「韓国軍慰安婦報道」もオンライン上からことごとく姿を消した。それ以降に出版された軍人の回顧録にも「韓国軍慰安婦」を語るものはなくなった。

こうした不可解な現象から、国防部を中心に政府レベルで慌てて「韓国軍慰安婦問題」の隠蔽工作に走った様子が浮き彫りになる。自国に都合の悪い問題は、ことごとく根絶やしにしようとするいつもの手口だ。

韓国軍が性の搾取を公然と行っていたことは疑いようのない事実である。だが被害者が自ら名乗り出られる社会環境は整っておらず、当事者への聞き取り調査すら困難だ。

今こそ韓国は、自国の歴史を直視し、韓国軍慰安婦問題を「重大な人権蹂躪」として調査すべきではないか。

* 文筆家・吉田清治氏の「日本軍が朝鮮人女性を連行し慰安婦にした」という証言。1982年に朝日新聞が大々的に報道し、以後、韓国政府が「強制連行の根拠の一つ」として利用してきた。昨年、朝日新聞はこれを誤報であると認め謝罪した。